
Firne～恋、おとぎ話～

カモシカ太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Firne～恋、おとぎ話～

【NZコード】

N92681

【作者名】

カモシカ太郎

【あらすじ】

エルフとジャイアント。それは、決して許された恋では無かつた。国を追放されたジャイアント『ワライズ』が真実を求める旅に出る。

いつになれば終わるのだろうか？

そんなことを考へてゐる余裕さえも無かつた。いや、それは今となつては全く無意味な行為だと誰もが知つていた。

必要なのは『勝利』の一文字。ただひたすら目の前の敵を倒すしかない。ただそれだけが自らの種族の生きる道。我が軍の未来、自分の明日のため。

幼き時から厳しい訓練を重ね、ただ敵を殺す術を叩きこまれる。

弱いものは生き残れない。

それは戦闘の場だけでは無い。この世界では生きるための最低条件であった。

そこは、弓から放たれた矢が飛び交っていた。相手から放たれた矢が大型の木の盾に突き刺さる。並の力ではこの盾は使いこなせないだろう。

わずか7人となつた小隊の隊長らしき人物が後ろを振り向き、残りの者へ気合いをかける。

その姿は一見女性と間違えてしまつような整つた顔立ち、肩まで伸びた赤い髪には驚くほど不釣り合いな鋭い目。そして長身に細身に見えるが引き締まつた筋肉。

怖い。

彼に睨まれた者の正直な感想であった。それほどまでに鋭い目付きをしていた。

「怯むな！ 我が軍の勝利のため！ 兄者との約束を忘れたか！？」

『ははつー』

叫びにも似た返事を返した。そして隊長らしき人物は腕に刺さっていた矢を引き抜く。表情を全く変えずに簡単に実行する姿には寒気さえもする。

『……ふん、ガキの玩具が』

引き抜いた矢を見たかと思えば、馬鹿にしたように鼻で笑った。それを片手の指を使いへし折る。音をたてて矢が別の形に変わる。

「行くぞ！ 僕に続け！」

『つーー！』

小隊が盾を構え、雄叫びをあげながら相手の群れに向かつて突進して行つた。躊躇は一切しない。ただ目的に向かつて突撃するのみ。

そして7人の小隊が1つの群れに向かつて激突した。敵はまる

で象に突進されたかのようすに弾け飛び、宙を舞つた。その様子を見て他の敵は一瞬で驚きの顔を浮かべた。

『くつー！』

敵のうちの一人が恐怖に耐えきれなくなつたのか、その場から立ち去りうと背を向けた。その瞬間。

『ギヤアアアアー！』

自分よりも巨大な剣により胴体を斬られる。いや、この場合は『斬る』と言うより『叩き割る』といった表現が的確だろう。この剣切味こそ無いのだが、あまりにも巨大すぎるゆえ、振り回したときの威力は想像を絶するものだった。

その証拠に敵は数メートル吹っ飛んだかと思えば、一瞬足りとも動かなくなつてしまつた。

「戦場で敵に背を向けるとは、愚かな種族だ！」

そう叫び、小隊の隊長は巨大な剣を振り回したときの、次々と敵を倒していく。一振りで何人の敵が吹っ飛んだ。

敵は耳い長が特徴の種族だった。体長も敵の小隊よりも半分ほどしかなく、弓の扱いを得意としている彼らにとつて接近されるこの状況は確実に不利である。

小隊が敵軍と戦つていたまさにその瞬間。

『ギヤアアアー！』

小隊一人の叫び声が鳴り響いた。隊長が声のした方を振り向いた。

同時に数発の矢が勢いよく小隊を目がけて向かってきた。反射的に矢を大型の剣で弾く。

『ぐはつ！』

反応出来なかつた小隊の胸に、容赦なく矢が突き刺さる。確実に急所を狙つたその技はただ者ではない。

「くつ……誰だ！？」

隊長を含め、奇襲を回避した三人は叫んだ。

やがて敵が姿を現す。どうやら敵も少数で構成された部隊のようだ。赤で統一された鎧は、守りよりも動きやすさを重視している。隊長が呟いた。

「なるほどな……ガーディアンか」

ガーディアン。

それは戦闘のスペシャリストのみで構成された精銳部隊である。機動性を重視して、少人数で構成されている。敵軍から最も恐れられている部隊だ。

ガーディアンのうちの一人が小隊の隊長に向かつて話し掛けた。

「部隊が全滅仕掛けてるとの情報を聞き、応援に来てみれば……。ワズがいるとは……とんだ獲物がいるようだな。貴様を殺せば長も

喜ぶことだらう」

小隊の隊長の名をワイズと言つた。敵にも広く名を知られていないことからもわかる通り、その赤髪、鋭い目、そして一騎当千と言つても過言ではない実績から、耳長からは『戦鬼』と呼ばれ恐れられていた。これほど彼を表現するのに適した言葉は無いだろう。

ガーディアンはあつと言つ間にワイズを取り囲んだ。そしてワイズに向かつて言い放つ。

「今日で貴様も終りだ。随分呆氣ないものだな」

ワイズは不気味な笑みを浮かべると皿らを取り囲んでいるガーディアンに向かつて言った。

「お前達は何か勘違いしていいのか？　だが、たつた5人で俺の前に現れたことだけは評価してやる」

そう言つてワイズは全身に力を込める。

すると体中の筋肉が先程の倍近くに膨れあがつた。そして、普段の冷酷で鋭い顔からは想像も出来ない不気味な笑みを浮かべた。

これが一般的に言つ『キレる』といつものだらうか？

そして足を顔の位置まで上げて、地面に向かつて勢いよく叩き付けた。

凄まじい音と共に大地が揺れる。

『…?』

ガーディアン達が怯んだ瞬間、ワイスが飛びかかった。

振り回される大剣をガーディアンは膝の力を抜き、しゃがみこむようにして間一髪でかわした。そして後ろに飛び跳ねる。

それをみた小隊の残り二人も一斉に敵に向かつてゆく。

『ぐつー…』

ガーディアンが着地と同時に素早く弓を構える。その隙にワイスが距離を縮めた。今度は敵の胸ぐらを掴み、別のガーディアンに向かつて投げ飛ばした。

飛んできたガーディアンを受け止めると、衝撃で後ろに倒れる。

「ワイスさん…逃げてください……」

不意に隣から声が聞こえる。小隊のうち生き残っているのはワイスを含め一人だった。しかし、残りの一名も先が短いのが一目で分かつた。体中に矢が突き刺さり無惨な状態になつてている。

その光景を見たワイスの脳裏にある一つの映像が浮かんだ。

黒髪の少年がいた。

地を這つている。

身体中矢が突き刺さっていた。

それでも進み続けた。

やがて力尽きたのか動きが止まる。

なんだこれは？

少年は蚊の泣くような声で呟いた。

『……………。……………ず……………会いに……………』

聞こえない。コイツは誰なんだ？

そして今度はどこからか女の声が聞こえた。

『クオーター…クオーター…』

クオーター？

その時だつた。

「隊長！！」

隊員の言葉で我に帰つた。肩に激痛が走つた。

「ぐつー！」

矢は隊員のトドメとなりその場に倒れてしまつた。ワイズの肩にも矢が突き刺さつてゐる。

「俺だけが逃げるなんてこと出来るか！ それならば死を選ぶ！」

叫ぶと同時に、一気に身体中の力が抜けた。それを見てガーディアンがワイズに向かつて言った。

「どうだ？ 毒の魔法を込めた矢の威力は。魔法でしか治すことが出来ない」

そしてさらにワイズに矢が突き刺さる。

「ぐはつー！」

しかしワイズは起き上がり、敵に向かつて行つた。

「ならば……お前らを全員道連れにするだけだ……」

再び不気味な笑みを浮かべながらガーディアンに遅いかかった。

反撃しようとしたガーディアンに他のガーディアンが叫んだ。

「待て。ヤツはもう永くない。それに、ヤツは指一本でも戦うだろう。出来るだけ被害は抑え無駄な戦いは避けるべきだ」

「了解」

そう言つと、ガーディアンたちは退散して行つた。ワイスが必死に追い掛けるが次第に意識が無くなつてゆく。

* * * *

雪が積もつていた。やがて風が吹き、吹雪となる。
どれほど経つた？

それさえも分からなかつた。雪原の中、ただ一人倒れこんでいる。

「一つだけ分かる」ことと言えば、自分の命があと少しで無くなると呟つことくらいだ。

寒さにま慣れている種族とは言え、瀕死の状態にはきつい。

「俺は……ここで死ぬのか……」

意識が遠くなる。

兄者……すまない……

ジャイアント族が真の勝利を掴むまで戦い続けるつもりだったが……。

じつやらいじめでのよつだ。

そして瞳を閉じた。

『え……か……？』

『も……もし……』

…………

『そ……えますか?』

ああ、そろそろ消える…………。

『聞こえますか?』

『もしもし~し』

「ん……」

ひとつとおぶたを上げる。とても重い。

『よかつた……無事みたいですね』

俺の前にあつてはならないことがおきてる。俺は相手の顔を睨みつける。そして声を絞り出すよつて言った。

「く……エルフか……」

死ぬ間際に見たものが耳帳とは……。

「殺せ……俺は誇り高きジャイアント族だ……情けは無用……」

言葉を口にするたびに傷が痛む。だが少しの命。俺は言い放った。

「エルフに治療されるなど、もつての他だ……。しかし……せ……」

「がはっ」

そう言って咳き込んだ。降り積もった雪が赤色で染まる。

『ま、動いちゃダメですよ。今治療するのでもつてくださいね』

「やめておけ……俺を誰かわかっていてやつてるのか?」

俺は相手を睨みつけ、続けた。

「今まで戦争でどれほどの中を殺したか……」

「エルフ共に恐れられているジャイアントだ……お前が俺を治療した

のなり……』

相手は表情一つ変えずに『じゅうじゅう』を見ている。

「俺は真っ先にお前を……殺す

『だつたら治つたら殺せばいいでしょ？』とにかく今はお黙りな
れい』

「…？」

手が優しい光に包まれた。それを傷口に当てる。

傷が……消えていく…。

『はい、無事に終わりましたよ』

体が驚くほど軽かつた。俺は状況を理解出来ず、ただ立ち尽していた。

『これでも私、地元ではヒーラーをしてるんですよ。アナタが殺したというエルフ、もしかしたら助かってるかもしれませんね』

そして眩しい程の笑顔をこちらに向けて笑った。薄いピンク色の透き通った髪は背中まで伸びていて、目が細い種族のはずだが、『イツはパッチリとした目をしている。しかし、長い耳が何よりもエルフと言つ証拠であった。

『あは

「…………」

何がなんだかわからない。馬鹿にされたのか？　俺は……コイツに……。

「なぜ……助けた？」

エルフは真顔になると、真剣な様子で答えた。

「よくわかりませんね。ヒーラーらしく、目の前の怪我人がほつとけなかつた、とでも言つておきましょつか」

「一応らしさ言つておく。だがな……」

一呼吸置き、再び睨みつけながら言つた。

「次会つたら間違いなく命は無いと思え」

それを聞いたエルフは笑顔で答えた。

「はい」

俺は背を向け歩き出した。

するとエルフが俺に向かつて叫んだ。

『実はナイルの南東にある小さな湖にょつちゅう遊びに行つてゐるのでも、良かつたら来てくださいな』

『あは

俺は振りかえることはなかった。

ひたすら無心で歩いていた。

そして歩みを止める。

考へても答へは出ないことがわかっているの元の。

真っ白な雪原の中にただ一人、立ち廻く。

「さて、今日も行くかな…」

俺はナイルへと向かつた。

ナイル。ここにはジャイアントが古代から暮らしている場所。奥に巨大なナイル城があり、行く道に民家や店などが立ち並んでいる。

俺は産まれも育ちもこの街だつた。

幼い頃に才能を見い出された俺は、ひたすら戦闘の術を教えてもらつた。そして戦場では、ただひたすらジャイアント族の勝利のために戦つた。

しかし……。

最近はよくわからない。

そして、こんなことを考えている俺自信も。

そんなことを考えているうちにナイル城へとたどり着いた。

『ワイス様、御勤めご苦労様です』

「ありがと。報告に戻った。開けてくれ」

『ははっー』

高い金属音をたてながら扉がゆっくりと開いた。そのまま王が座っている部屋に移動する。

そこはいつ何が起きてても対応出来るよう部屋の両端に武装した兵士が並んでいる。

俺がその間を通ると、武器を天井に向かって上げる。そして、全員合図も無しに綺麗に元の姿勢に戻った。

俺は一礼したあと、王に向かつて歩み寄った。

「只今戻りました。兄者」

「うむ。『苦労様であつた』

目の前にいる歳はとつてているはいるが、まだまだ衰えを感じさせない肉体、何もかも見透かしているような目をしているこの人物は、ここ、ナイル城の王。長年に渡り、ナイルを治めてきた人だ。ジャイアントは兄弟意識が強く、例え血が繋がつていようがいまいが、皆兄弟と言つ呼び方をする。

「なにかエルフ族に関する情報は手に入つたか？」

「いいえ……敵……」エルフはミカヅキ地帯への進出は諦めたようですが

「なるほどな」

王はそう言って椅子に肩を下ろした。そして口を開いた。

「かつては戦場で戦鬼と呼ばれ、耳長から万夫不当と恐れられていましたおぬしが偵察兵とは……」

更に続けた。

「あの戦場を境に、随分と大人しくなつたものよ」

「申し訳ござりません」

俺はそう言って頭を上げる。そこに頭を上げるよつて言った後、こちらの顔を見て言つた。殺氣とはまた違つた力がある。

「ワイス兄弟の力は、我々ジャイアント族の勝利には無くてはならないものだ。また以前のような姿を戦場で見せてくれる」とを期待しているぞ

「…………はい」

俺は一瞬言葉に詰まりながらも答えた。そして王が再び語り出

す。

「よし、さがつてよー」

「あ、あの…兄者…」

「つむ?」

「また外出の許可を頂きたいのですが」

王は少しの間考えた。王室内を静寂が支配する。

「最近は特に増えたな……。よからう。ただしエルフ族には気を付けるのだぞ」

「ありがとうございます兄者。では…」

そして俺は王室を後にした。

* * *

ワイスがいなくなつた王室にて。

王が自分のすぐ隣に待機している人物に話し掛けた。

「ネロよ」

「へいー!」

ネロと呼ばれた人物が返事をする。彼は王の護衛をしている部隊の中で最上級に位置する人物だった。

「ワイス兄弟の後をつけではくれまいか？」

「オラがですか！？」

王は、うむ、と言つて頷いた。

「ワイス兄弟は恐ろしく勘が良い。並のジャイアントではヤツを追う事は出来ない」

「で、でもビリッヒー！」

「ワイス兄弟が最近、エルフと接触しているとの噂があるのだ」

「嘘だ！ ワイス兄弟ほど愛国心のある人がそんなこと……」

ネロが叫んだ。彼はワイスとは昔からの友人だった。信じられないと言つた様子である。

「うむ……。嘘であるとは信じてはいるが、もし本当ならば、ジャイアントにとつて不利な戦況を招く事になる」

「それは……」

王の言葉は確実に的を射ていた。ジャイアントの情報が敵に漏れてしまつと、それが敗北に繋がらないとは限らないからだ。

「頼んだぞ」

「わかつたよ兄者！」

そう言つて猛スピードで王室を出でていった。

残された王が呟いた。

「ワイス兄弟よ…。願わくば嘘であつて欲しいものだ」

* * *

俺はある場所に向かっていた。ナイルから東南にある木に囲まれた湖。

そして目的地にたどり着き、とある人物がいることに気付いた。

俺はその人物を確認した後する。そして何故か溜め息が出た。

近くに寄り、後ろから話し掛ける。

「またここに来てたのか」

その人物は振り向かずして俺が誰だか分かつたようで、「フフ、アナタこそ」と言つてこちらを振り向いた。

相変わらずエルフと言つことを忘れていまいそうな大きな目に、

透き通つた薄いピンク色の髪。そしていつも same の笑顔が向けられた。

俺は何も言わず隣に行つてから座り込んだ。俺が座つて、やつと同じ身長になる。

田の前には湖が広がっていた。この大陸は一年中雪に包まれているのだが、不思議とこの湖の水は凍らなかつた。

「最近は随分とここに来る機会が増えましたね」

「お互い様だな」

「コイツの名前を『フィーネ』と言つた。あの戦場から帰り、次の日ここに湖に来てみると本当にコイツがいて驚いた。しかし、不思議と殺意は無かつた。その日から、たびたびやつて来ては適当な会話を続けていた。

そして湖を見つめた。

「それは…居心地がいいのか？」

フィーネが笑いながら答えた。

「フフ、でなければこんなに通わないでしょ？」

確かにそうだ。ここはジャイアントの大陸。エルフの大陸は海を挟んでむこうがわにあつた。特別なことが無い限りは通わないはず

だ。

「最近のジャイアントたちの様子はどうですか？」

「相変わらずだな。チャンスがあればいつでも戦闘を仕掛ける勢いだ」

「それもお互い様と云つていい」

『あは』

「この時俺の頭にフィーネと出会ったときの出来事が思い浮かんだ

本当によくわからない。

「どうしました？ いつもよりボーッとしてますよ？」

顔を覗き込みながらそんなセリフを言った。驚いて少しだけ下がる。

「いや、君のことを思って出してな

そしてフィーネの方を向いて言った。

「本当にお前は変わったエルフだな」

「やうですか？」

フィーネは軽く眉間に皺をよせ口を尖らせた。その様子から本気で怒つてないことがわかる。

「私から見れば、ワイスさんもかなり変わったジャイアントですけど」

「本当にお互い様だな」

少しの静寂。フィーネは首を斜めにして手をつぶりながら鼻唄を歌っていた。どこか懐かしい。やがて、俺が先に口を開いた。

「いつたい俺はどうしてしまったんだろうな」

フィーネは相変わらず手をつぶり、体を軽く揺らしながら気持よさそうな様子だった。俺は続ける。

「昔は戦神とジャイアント族から称えられ、自分たちが正しいと信じこみ、ただひたすら戦を繰り返したが、結局何が正しいか分からなくなつた」

フィーネはゆっくり手を開けてこちらを見る。

「先が見えるなら、希望が見えるなら好きにすれば良いかと思いますよ」

「お前は、どんな未来を望む?」

「私ですか!? エヘッヒ…」

急でびっくりした様子だったが、やがて俺に向かつて言った。

「みんなが元気でいてくれれば、良いかと思いますよ」

「それは、ジャイアントも含めてか?」

再び笑顔を見せた。ハイツの笑顔はどうか神秘的で、よく分からぬ気持ちになる。

「もちろんです。私には戦争の先は見えませんから」
『あは』

「エヘッカ…」

静かになるとハイツは再び瞳を閉じる。

「出来るなら、俺も見てみたいよ」

争いの無い、平和な世の中を。

どれ程経つたか分からない。辺りが少しだけ薄暗くなっていた。

「じゃあ、そろそろ帰るよ」

「はい、私はもう少ししてから帰りますね」

「うして俺は湖を後にした。

* * *

「わ、ワイズ兄弟が！？」

ネロは田を擦つてから再び前方に田をやつた。

「ひぎああー！」

まさかあのワイズ兄弟が……。

「オラ、どうしよう……」

その時、ワイズと一緒にいるヘルフの声が聞こえた。

『最近のジャイアンツたちの様子はどうですか？』

「ひいいーー？」

「これはもう決定的なセリフだつた。

「たたたたた大変だ！ 兄者に伝えないと！」

そう言つてネロはナイルへと大急ぎで帰つたのだった。

「なんだと……？　ワイス兄弟がエルフと……」

驚きを隠せない王の言葉にネロが力なく返事を返す。

「へい……。信じられないけど……」

「ナウガ……」

そう言って王は顎鬚を数回なでた。やがてネロに向かって言ひ。

「明日だ」

ネロはうつむいていたが、顔を上げて王を見る。

「同じ時間に兵を向かわせる。相手はあのワイス兄弟だ。手荒になつても構わない」

ネロは悪戯を注意された時の子供のよつて、申し訳なさうに答える。

「でも……、あまつ氣がのらないのだ！　きっとなにか訳があるだよ
う！」

「ナウガ思いたいが……。軍の情報漏れは致命傷になる」

声の音量を下げ、咳くようにして「許せ、ワイズ兄弟」と言って背もたれに体を預けた。

＊＊＊

「只今戻りました」

俺はフイーネのいた湖を後にするが、特に寄り道はせずにまっすぐナイルに帰った。

「つむ、今日はゆっくり休むがいい」

「はい、兄者」

そして俺は城の内部に用意されてある自分の部屋に向かった。

「ワイズ兄弟…」

ネロが力なく囁いたが、俺の耳に入ることは無かつた。王室が異様な雰囲気に包まれていた。

次の日も俺は任務を終えて王に外出の許可を貰いに行く。

「兄者、今日も許可を頂きたいのですが」

王は悩み答える。

「やはり、今日も行くのか?」

「……はい」

再び王室が異様な雰囲気に包まれた。ネロが王を悲しそうに見る。

「兄者……」

「しかたがあるまい、気を付けて行くといい

「ありがとうございます」

こつもの見慣れた道を歩いて行く。雪原の大地をどこまでもど

「までも。

今日も雪が少しだけ降つていて、足跡を一つ一つ消していく。

湖に着くと、またフイーネが座りながら湖を見ていた。

「……やあ

「ほんとにちは

毎日変わることのない、いつも笑顔だった。笑顔を見せた後、「今日も平和ですね」と言つた。俺は「そうだな」と、適当に返す。

「ワイヤーさんはこんな話を聞いたことがありますか?」

「どんな話だ?」

「愛し合つたエルフの女性とジャイアントの男性のお話です

「...?」

俺は驚いた顔でフイーネを見た。フイーネはニッコリ笑つて、話を続けた。

「ある一人のエルフとジャイアントが当時から戦争の絶えなかつた中で愛し合つてしまつたんです」「見つからぬように内緒で会つていたのですが、ある日、エルフ

の町に住む兵士に見付かってしまったのです

「…………」

俺は黙つてその話を聞いていた。

「エルフの町の人々は、そな女性にジャイアントの情報を探るよう命にします

「それで結局、自らの町の人々に絶望したエルフの女性は、『封印の洞窟』と呼ばれる場所で自らの命を絶つた、というお話です

「ジャイアントの男はどうなったんだ?」

その言葉を聞いたフィーネは少し考える。

「旅に出たと聞きますが、その後どうなったのかは分かりません

「真実はすべて闇の中か……」

そこで俺はあることに気がつく。

「しかし、なんでお前がその話を知ってるんだ?」

「フフ」

俺の言葉がおかしかったのか、フィーネは口に手をあて、クス

クスと笑った。

「あくまでもおどき話ですよ ワイズさん本気にしちゃって可愛い

です「

「や、そつか…」

再びフィーネがクスクスと笑い始めた。

その時、林の陰から数名のジャイアントが現れた。

「そこまでだー。」

俺たちは一斉に振り替える。そこにはナイルの兵士たちが武器を構え、並んでいた。

「しまつた！ 見つかったか？！ フィーネー、お前だけでも逃げるんだー。」

「そんなわけにはいきませんー。」

やや齧えながらも、胸元から魔法を唱えるためのワンドを取り出す。

ジャイアント兵士たちの一人が俺に向かつて言った。

「ワイス兄弟ー、どうか退き下がってはくれないか？ なるべくジャイアント同士での交戦は避けたいのだ」

「フィーネを逃がしてやるんだつたらおとなしく退けりー。」

ジャイアント兵士は首を横に振りながら答えた。

「それは出来ない！ そのエルフがスパイの可能性もあるからな！」

「交渉決裂だな！」

俺がその言葉を言い放つと同時に戦闘が始まった。

相手は六人。全員槍を装備している。

飛びかかってきた一人を回避して、勢いを利用してそのまま投げ飛ばす。

相手はそのまま地面に激突した。ピクリとも動かなくなつたが雪がクツショーンの役割になつているため、死にはしないだろう。

そのまま武器を奪い取り、頭の上で振り回した。

『うわあっ！』

鎧の上から強烈な打撃が加わり、一人の兵士がよろめいた。

トドメに打撃を加え失神させた。

『くつー』

残りのジャイアント兵士がフィーネに向かつて行つた。

「フィーネ！ 避けろ！」

しかし、フィーネは避けよつとはせずに魔法を唱えた。

「ブリザード！」

吹雪が敵の足元を襲い、動きをとめてしまった。
残された一人を見て、俺は言い放った。

「まだやるのか？」

「く……、怯むな！ 行けえ！」

木の陰からさりにジャイアント兵士が現れた。

「ちつ、俺一人になんて数だ」

ジャイアント兵士達が襲いかかってくる。

「きやあ！」

突然フィーネの悲鳴が聞こえた。

「フィーネ！ ぐつ……」

フィーネを見た矢先、俺の体に槍の先端が刺さる。槍を掴み、
一気に上に持ち上げた。敵が宙を舞つた。

「まだわからないのか！？ お前らが何人束になつても無駄だ！」

言つた直後、体が揺れた。どこかおかしい。

「くそつ……」

「こんなこともあるうかと、槍に特殊な麻酔を塗つてある」

「貴様…」

ジャイアント兵士が他の兵士に命令をする。

「よし、ワイス兄弟を連れていけ！」

「う……」

「離せつ！ フィーネを治療しないと死んでしまうつー。」

力が入らない。意識が遠くなる。

「頼むから離してくれ！」

「わ…私は大丈夫ですから…あはは…」

「フィ……ネ…」

そして視界が真っ暗になつた。

田覚めると、そこは城の部屋だった。体を起すと同時に、頭に軽い痛みが走った。

どうやら大丈夫らしい。

「寝てたのか……」

そして腕に巻かれた包帯を見る。

「フィーネ……」

「フィーネ！？」

「フィーネはどうなつた！？」

俺は勢い良くベッドから起きて王室へと急いだ。

やがて王室に辿り着く。そして王座に座っている王の前に立つた。

「気分はどうだ？」

「いえ……まだ少し頭が摇れるくらいで……」

王は「やつか……」と言つて黙つてしまつた。俺が聞きたいのはそんなことじやない。

「それより、フィーネ……いや、あのヘルフはどうしましたー？」

Hは暫く「ひかりを見つめる。

やがて目をつぶりながら首を横に振った。

言葉がなくても、その行動を見るだけで理解できる。

死んだ。

殺された。

フィーネ死んだ。

フィーネが殺

。

「そんな……どうしてですか！？」

Hは落ち着いた様子で言った。

「我々はジャイアント。Hルフと仲良くなる」とは出来ないのだ

「わかりません！ フィーネが一体何をしたと言つたですか！？」

「すまない……分かつてくれ……」

今まで国のために戦い続けてきた。

エルフ。

ジャイアント。

エルフ。

ジャイアント。

エルフジャイアント

エルフジャイアント。

何が良いのか分からなくなってきた。

「もう、戦争なんてしたくない……もう……」

「すまん……としか言えない」

王は再び黙ってしまった。言いたいことが分からない訳ではない。しかし、それはフィーネがスパイだったら、という話だ。

黙つて立ちぬくす俺に向かって王が語りかける。

「ワーズ兄弟よ…。お前がどんなことをしようが、我々は血の繋がった誇り高き兄弟だ。どんな刑に処することもできん」

黙つて王を見つめていた。

「しかし、ヘルフとの争いを忘れた者をナイルに置いておくわけにはいかんのだ。分かつてくれるな？」

「…………はい」

俺は少し間を置いてから続けた。

「1Jの程度の処置にしていただき、感謝します」

俺の言葉に王は頷き、やがて言い放つ。

「今日中に1Jを出て行ってくれ

「はい。では失礼します」

「うむ……。いつかまた戻つて来てくれる」と信じてこるが

俺は振り向きもせずに王室を後にした。

街に出て入り口へと向かう。人々の視線が集まるのが分かる。中には露骨に指を指してから内緒話をしている者もいた。

どうせ出でいく。気にもならない。

そして、街の入り口に付近に着いた時だった。

「ワーズ兄弟～！」

ネロが勢い良く走ってきた。そして俺の前に来る。

「オラのせいなんだ！ オラが…つか、秘密をばらしたりしなければ…ひつく」

顔中しわくちゃにして鼻水を垂らしていた。周りの田を気にする様子もなくただ泣いていた。

俺はネロの頭に手を置く。

「命令だったんだろ？ 仕方がなこ。それにお前の」とだ、一度は信じてくれただる」

その言葉を聞いたネロは「うんうん」と言いながら泣き続けていた。

「じゃあ、やるやく行くよ」

「戻つて来るよねー？」

ネロが必死にこちらを見て言った。

俺は何も答えずネロに背を向け、ナイルを後にした。

湖に来てみたが、そこにはもうフィーネの姿は無かつた。遺体もない。きっと兵士たちに…。

「くつ……」

俺は地面を見た。雪原の中に、なにやら輝く物体が落ちていた。

「水晶か？」

ピンクの色をした丸い物体。太陽にかざして見ると、綺麗に透き通つた。フィーネの笑顔が見えた気がした。

俺は水晶らしき物体をポケットに入れる。

「フィーネ…君の意思は俺が受け継ぐよ

「エルフとジャイアントが……争いのない平和な世の中ににしてみせる」

必ず。

「じゃあ、行ってくるよ」

「うじて、俺の行くあてもない旅が始まった。

世界にはいくつかの大陸がある。そして、この世界には、ジャイアンント、人間、エルフ、獣人と呼ばれる、モンスターとは違う、知能が発達している、文明を持った種族が暮らしていた。しかし、世界には未開の地が沢山あり、まだまだ俺の知らない種族がいるかもしれない。

「寒いな…」

俺はナイルを出ると、ただひたすら北に歩いていた。特に行く先が決まっている訳じやない。産まれた時から戦闘の術を叩き込まれ、そして、戦闘だけで生きてきた俺にとって、金もなく知識も無いこの状況は少々苦しかった。

風も次第に強くなり始め、降り積もる雪が容赦なく横殴りに吹き荒れる。ジャイアンント族伝統のコートの様な防寒具を着ているとは言え、やはりこの地の風は寒かつた。

「とりあえず宿を探さないとな…」

いくらなんでも野宿は確実に死を意味していた。当たり前だが。

暫く歩いていると、突然高い声の叫び声が聞こえた。

『ルビーショット!』

俺は殺氣を感じ、反射的に前方に屈んでいた。頭上スレスレで『なにか』が通過する。少しでも遅ければあの『なにか』が頭に直

撃していただろう。

俺はすぐに体勢を立て直し、身構えた。

「誰だー?」

『え? 嘶つた…』

吹雪で視界が狭くなっていた。やがて姿を現す。

『あ……』

奇妙な格好をした女性だった。青のトンガリ帽子を身に付けマントを身に付けている。隠れ気味ではあるが帽子とマントの隙間から、ブルーの髪が少しだけ見える。手を口元まで持つて行くと、魚のようにパクパクさせていた。

『いやあーん! 今度こそやったと思ったのにいい!』

そう言つて力の抜けたように地面に座り込んだ。そしてただこねるようにならんだ。

『うえーん! まさか人だつたなんてえ! お腹すいたああ!』

『何してるんだ?』

俺が話しかけると、何かを思い出したように駆け寄つて來た。

『お姉さん! 大丈夫! ?』

ん？ 何かおかしいよな。

「ちょっと待て。俺は男だ」

『はつー』

目を見開き、再び口を押さえる。

『まさかダメージのせいで記憶がおかしくー… もだつ……ヒーリング… よつ… だつ、大丈夫ですかつー…』

俺は溜め息をついた。そしてこの女の首根っこを掴み引き上げる。

「ほり、この通り無傷だ。」

そして降ろす。畠然としていた。

ああ、コートを着ていて肉体が隠れてるから間違われたのかもしれない。

『す、すい』

そして急に目を輝かせ始めた。なんて表情の豊かなヤツだ…。

『へへ… ふん… わあ～』

なにやらブツブツ弦きながら俺の周りを回った。

『ねえお兄さん！ 何か食べに行かないー！？』

「…………え？」

いきなり何を言い出すかと思えば……。

「いや、俺は先を急いでるんだ。すまない」

そう言つて立ち去らうとする。すると回り込むよつとして田の前に立ちはだかる。背は俺の半分以下で見上げるよつにしてこちらを見ていた。

「お兄さんはジャイアントだよねー? 先を急いでねって、ギリギリー?」

容赦ない質問だな。

「ジャイアントだ。行く先は……」

困った。しかし、適当に誤魔化さなければいけないな。

「北だ」

その言葉を聞かず、しめた、と言ひ顔をして、

「あ～、嘘だ～！　ここから北は海岸があるので何も無いよ～！　あるのは変な魔法を研究している怪しい黒魔道士の家だけ！」

と勢いよく言い放つた。

だな。 しる。 たま。 海岸が。 知らぬい。 うかに不分かりていなか。

どうやらこれ以上は嘘をつかない方が良さそうだ。

「食べに行く……とが言つたな。それで狩りをしていた訳か

「うん……。喧嘩して家出したのは良いけど、なかなか食料的な問題がねえ」「

そして背伸びをして「また街に這つて食べるしか無いのかなー、でもお金がなあ」

「なるほど、それで俺に金を出して貰おうとした訳か

「ギクッ…」

なんてわかりやすいヤツだ…。背伸びの動きが途中で止まった。

「残念ながら金は無い」

すると女は、うー、と口を尖らせた。そして、

「じゃあさ、狩りを手伝つてよー。テントはあるからわー。料理は出来るよー。」

と言つてきた。

「テントか…。確かにそれがあれば助かるな。

「わかった。手伝おうか

「わーい…」

女が飛び跳ねた。そして急に真面目な顔になり人差し指を自分の鼻付近まで持つて行き、俺に向かつて言った。

「狩りは危険よ…」この辺りには恐ろしいモンスターが沢山いるんだから」

何やら得意氣だった。そして、フフン、と言しながら田を閉じた。

「モンスターねえ…」

俺はそう呟きながら近く似合つた折れた丸太を持ち上げた。

「ち、ちょっと… 一体何をする気…？」

慌てた様子で俺に言った。俺はある程度距離をとり、

「下がってる」

そして木のある方向に向かつて、勢いよく投げつけた。

「…………」

訳のわからない、と言つた様子で女はこぢらを見ていた。

俺は黙つて木を投げた方向に向かつた。女もとりあえずついてくる。そして、

「モンスターと戦つののは『イツか?』

そこには丸太が直撃して氣を失つた巨大な牙のある豚のような生き物が倒れていた。

「あ……えっと…。あは……あははは」

女は固まつたまま動かなかつた。笑い声だけが雪原の風の音に混じり、響いていた。

テントに入り、鍋を囲む。先程のモンスターはこの女が料理してくれた。

「ひゅーいねー、なじぇもんしゅたーがいりゅとわかつてやの？」

固い肉を噛みちぎりながら俺に向かつて質問していた。何を言つてゐのかわからなかつたため、俺はスープを飲みながら無視をした。

少しの時間がたち、やつと肉を呑み込んだようすで、同じ質問をしてくる。

「凄いねー！ なぜモンスターがいるとわかつたの？」

強いヤツだな…。思わず軽く笑つてしまつ。

「会話の途中あたりか……」こちらの様子を見ながら近付いて來るのがわかつた

「すう～い！ 野生の勘！？」

「……そんな感じだ」

そう言つて無くなつた皿に料理を盛り付けた。相変わらずこの女は目を輝かせながらこちらを見ていた。

「へえ～……うんうん……わあ～……」

やがて、まともな言葉を喋り始めた。

「名前を聞いても良いかな？ 私はマリーネ。魔法の研究をしているの」

『ひづや』先程の俺の頭上をかすめた『なにか』は魔法だつたらしい。

「ワ、ワイスだ。今は訳あってナイルには戻れない

「ワ、ワイス！？」

急にマコーネが顔色を変え後退りした。

「い、いやあ……、幼少期に生き物の骨をへし折ることに快感を覚え、一日に一度は血を見なければ気が狂い暴れだし、拳げ句の果てに見方までも殺し始め、王さえも手出しが出来ず、周りにいる『全ての生命』から恐れられている人物……ワイス……様……」

そして頭を下げながら必死に叫んだ。

「すすすみませんでした！ 先程の無礼をお許しください… 体だけはああ！」

「……」

尊はと黙つたまゝまで勝手に一人歩きするんだな…。

「いや…、大丈夫だ。そんな『マジ情報氣』にするな

「…ふえ？」

ハヨウ「リと顔をあげた。田には涙が浮かんでいる。

「戦争だからな。幼い頃から戦うのはしょうがなかつた。しかし、そんなに悪趣味じゃない。生きるためだ」

「ほえ？」

「それに、王さえも手がつけられないとか言つたが、仮にそうだとしたら現に俺をナイルから追い出したのは誰になる？」

「……あ

マリーは何か納得したよつだ。

「だ、だよね～、何かおかしいと思つたよ～あはは…

「大体おかしいだろその話…」

「そう?」

マリーネは眞面目に悩んでいた。

「でも、エルフから恐れられていたジャイアントだよね」

エルフから恐れられていたジャイアント…。コイツは知らないだけだ。怒つても意味がない。

「……ああ。昔はな。今はエルフとジャイアントが仲良くなる手段を探している」

「え? エルフとジャイアントが?」

不思議そぞろ見ながらを見る。

「エルフとジャイアントについて研究をしている変人さんなら知り合いでいるよ!」

「え? それは本当か?」

「うん。普段は魔法を研究しているんだけど、趣味でいろんな研究をしてるよ」

そんな人がいたとは…。どうせ手掛けは少ないんだ。行ってみる価値はありそうだな…。

「明日でいい。案内してくれるか?」

外はすでに暗かつた。今出歩くのはまだどう。マリーネはなぜか少し悩んでいた。

「うへん……緊急だもんね……、しうがないつか

何やら呟いていた。

「無理はしなくても良いんだが?」

「こやこやー」「うちの話でー、あはは……」

そして苦笑いをする。なにか事情がありそうだった。

「あれ、ワイス…横にならなーいの?」

「ああ」

テントの中でマリーネが毛布を被り、頭だけを出してい。俺が横になるにはテントが狭すぎる。それに…

「戦場でどんな体勢でも休まないといけない時がある。慣れてるよ

「まーまーそんな事言わずに」

マリーネはそう言いながら起き上がり、俺の手を引っ張った。両手を使つても俺の手を完全に包むことは出来ないようだ。

「…………」

マリーネの力では、俺を動かす事が出来るはずもない。俺はしようと頭を搔き、わざと引つ張られた。

そのまま足を折り曲げて横になる。

「ふふ、いい子いい子」

マリーネは何だか嬉しそうに頭を撫でてきた。そして毛布を俺の上にかけ、中に潜り込んだ。

「わあ～、やつぱりあつたかあ～い

毛布の中で暫く何やらモジモジしていたが、やがて寝息に変わつた。

「………… もう」

そして俺はゆづり毛布布団から出た。

「悪いな……他人が近づいたら寝れないんだ」

何故だかわからないが、幼い頃に親を離れ、ひたすら国に遣えていた俺は、一人で眠るのが習慣になっていた。戦場で身を潜めて眠ることも多かったせいでもあるが…。

そして座り込み、目を閉じる。

「…………おかあ…………さん」

マリーネの寝言だった。何やら悲しげな雰囲気がある。

「母さん…………か」

そんなセリフは幼少期以来だな。「コイツにも何かあったのだろうか。

マリーネの頭を一、二度撫でてやる。

「…………」

すると再び寝息に変わった。

俺は再び目を閉じ、眠ったのだった。

「さて、そのエルフとジャイアントを研究している人間のところへ案内して貰おうか」

「はーい！ まかせて！」

朝から機嫌が良いようだ。本人曰く「良い夢を見た」らしい。特に深くは触れなかつた。

そして俺たちは目的地に向かつた。そこであることに気付く。

「あれ、ここの方角には海岸があるとか言つてなかつたか？」

「そうそう。海岸沿いにある家だよん」

「たしか変な人がいるとか……」

マリー・ネはその言葉に反応したようだつた。

「そう！ 変！ ハンジン！ 朝から晩まで研究ばっかして
る変人さんよ！」

「そ、そうか」

勢いに圧倒される。恨みでもあるのだろうか？

そして再び歩き始めた。

昨日の吹雪が嘘のように太陽の光が降り積もつた雪に反射する。

一時間もしないうちに目的地にたどり着いた。外観は以外と普通だつた。

マコーネが先頭に立ち、扉を開けた。俺も後に続く。

「おや、ジャイアントのお姫さんとは珍しいですね
家に入るなり話しかけられる。今度は赤のトンガリ帽に奇妙な
耳飾り、腕輪…。確かに見る限り座しかつである。

「君がマコーネが噂していた黒魔道士か？」

相手は、アハハ、と言いつて咳払いをする。

「どんな噂かはまつこまないでおきましようか」

そして帽子をとった。青い髪を後ろで一つまとめている。

「いかにも、私が長年黒魔術を研究しているフレイと申します」

「家出した妹が帰つて来たのに無視かつ！」

マリーがフレイに向かってつっこんだ。みじめくマコーネの存在に気が付いたようだった。

「おや、マコーネ。お帰り

「家出して心配しなかったのかつ！」

ポカポカとフレイを叩いた。

「こてて、家出つて言つてもじょひあひうせつてゐじゅなこですか。

今回、だつて三日で帰つて来ますし。それに……

フレイはやつぱり田舎じく光らせた。

「マリーには特殊な小型発信機をつけてあるので、ビーハ屋の
か一目でわかるんですよ。今回もあまり遠くに行くなよひです
ね……フフ」

「誇らしげに笑うなああつ……」

マリーのつっこみがヒットした。これが普段の兄弟の仲なの
だろ。

そんな兄弟はさておき、取り合へず名乗ることとする。

「俺はナイルからきたワイズだ。今日はひつとお願

「ワ、ワイズだつて……？」

フレイが目を丸くして飛び跳ねた。

「ワ、ワイズって、幼少期に他人の骨を粉ごなにするハマリ、
やがて生き血の味を覚え、毎日飲まなければ周りをこれでもかとい
うほど破壊し尽し、拳げ句の果てに部隊の仲間までも戦場で皆殺し
にしてしまい、やがてはナイル王を王の座から引きずり降ろそうと
企てているという最凶最悪のジャイアント！？ 既に現在の王は殺
されて、替え玉といづ尊も……」

なにせら臂えている様子だった。先程のマリーの尊よりも過
激になつてないか？

そんなフレイにマリーが笑いながら言った。

「あはは、お兄ちゃんたら、そんな噂話を信じ切っちゃって情けない！　だいたいそんなのだったら私が無事で一緒に入られる訳ないじゃない！」

「へ、そつなんですか？」

恐る恐る「」ちらを見る。俺は呆れたよつて「ああ」とだけ返した。本当にこんなヤツに相談して大丈夫だろうか？

「いやー、びっくりしましたよ。噂とは本当にいい加減なものですね」

いい加減過ぎるだろ…。

そしてフレイは思いだしたように研究に戻る。

「おつと、失礼」

「どんな研究をしてたんだ？」

俺の言葉に気が付いたフレイは、なにやら得意気な様子で話しか始めた。この話すときの仕草は兄弟だから似ていてるようだ。

「完成するまでは極秘にしようかと思つてましたけど、別に隠すも

のでもないですね。黒魔術の最高峰……

少しの間を置き、続けた。

「その名も『メテオ』と書つものを探していなかったのです」

「聞いたことがあるな……。確か伝説の魔法使いの……」

言葉の続きをフレイが喋る。

「そう、伝説の黒魔道士『タール』が町に現れたドラゴンを一発で
しとめたと言われる魔法です」

「ドラゴンを一撃……。種類にもよるが、一般的なドラゴンでも、
ジャイアント兵士が数十人居てやっと仕留められるくらいだ。恐ろ
しい威力だな……。

「別に僕はそれを手に入れて世界征服だとか、そんなことは考えて
ないんですけどね」

フレイの音声ボリュームが上がつてゆく。

「ただ、黒魔術の最高峰と言われるメテオを完成させれば大勢の人々に認められる訳ですよ。」

そしてフレイは机を勢い良く叩いた。マリー・ネは欠伸をしている。

「長年の研究の成果がようやくみのる訳です……」

「なるほどな」

そしてフレイは「あ、失礼しました」と言つて咳払いをする。マリーネがコイツを『変人さん』と言つていたのも分かる気がする。

「それで、今日はなんの」用で？」

「実はな…」

「と書いた訳で今はエルフとジャイアントが共存する道を探す旅に出でる。昨日偶然外でマリーネに会つて、ここを紹介された、と言つことだ」

「ほお～、非常に興味深い話ですねえ。偶然にも私も最近、趣味でエルフとジャイアントについて調べていたところですよ」

「本当か！？」

隣で小声で「さすが暇入ね」とマリーネが言つたが、フレイには聞こえていないようだった。

「しかし、おとぎ話以外で本当に仲良くなつたエルフとジャイアントがいたとは…。共存は不可能とみて歴史の研究を進めていたのですが、一瞬で考えが変わりましたよ」

「ん？」

フレイは笑顔で答えた。

「エルフとジャイアントはその昔、共に助け合いながら暮らしていたといふこと」

「なんだとー？」

「それに、種族が対立した後にも愛し合つた人たちがいたと言つ」と

「その話なら知つている」

フィーネが最後に俺に話したおどき話のことだろ？

「エルフの女は自ら命を絶ち、ジャイアントの男はどうかに消えた、といふ話だろ？」

黒魔は田をつづり、うつづきながらこいつた。

「良く」存知で

そして、再びこひらを見て話を続けた。

「ただ、この話には深い訳があるのでないかと考えています」

まるで推理している探偵のように、呑みながら部屋中を歩き始めた。

「大体おどき話などは、昔あつた出来事を元にして、多少アレンジが加わつていたつするもので、地域によつて話が違つ、なんてのは良くあることです」

確かに。そんなこともありそつだ。

「最後にジャイアントの男が旅に出る、という場面なのですが、これは本当にいろんなパターンがあり、良く手が加えられている場面なのです」

そしてフレイは立ち止まり、一度じりじりを見る。

「ある説では、そのまま彼女の後を追い、自ら命を…、またある説ではエルフの町に復讐に向かう話…。見事に地域によつてバラバラなのです」

俺は素直に思つたことを言つてみた。

「本当にあつた話なら、その場面のことは誰にもわからなかつた、とこつことか?」

フレイは笑顔で答えた。

「やうです。しかし、問題は前の前のお話です」

そして再び推理するように足を動かし始める。

「面白こほど共通してゐんですよ。町の兵士に利用されそうになり、封印の洞窟に逃げ込んで……記憶の扉を作つた……と言つ話でしたが、ここがどの地域のお話を見ても共通しているんです」

「言ひ伝えつて大体の話は同じなのは当たり前じゃないのか？」

フレイは立ち止まつた。

「それを言つてしまつたらそれまでですけどね。しかし…」

今度は不気味な笑みを浮かべながら言つた。本当、兄弟そろつて顔のバリエーションが豊富だ。

「ただし、封印の洞窟とこいつ所は実在するんですよ」

なるほど…。行つてみる価値はありそうだな。

そんなことを考へていると、今度はマコーネがフレイに向かつて言つた。

「その場所は代々エルフ達によつて厳重に守られていて、正面から飛込むのは自殺行為よ」

そうなのか…。俺は思わず溜め息をつく。

「困つたな…。エルフとの戦闘はなるべく避けたい」

「いいから先はひたすら調べるのみ、ですね。眞実は闇の中なのですから、少しの可能性も捨てる訳にはいきません」

「手伝つてくれるのか?」

「私は賛成! 家にこりより楽しむつー!」

マリーはすぐに話にのつた。しかしフレイは考えていた。

「私も自分の研究がありますしねえ…本格的に協力出来るとは思いませんが…」

そして、何かを思い付いたように顔を上げた。

「ではこうしまじょー! 私の研究も残すところは材料集めだけなのです。手伝ってくれるなら、協力しまじょー。ワイズさんの旅について行く…といつ形で」

そうすればどちらも得をするな。もしかしたら他の大陸に行かないで行けないかもしない。

「わかった。出来る限り協力しよう」

するとフレイは都合悪そうに俺に向かつて話しかける。

「あのー早速…お手伝いをしてほしいのですが…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9268i/>

Firne～恋、おとぎ話～

2010年10月14日23時28分発行